長谷川 章
AKIRA HASEGAWA

理想都市ニューヘヴンとピューリタニズム

――「神の国」と正方形の形而上学

Puritanism and the ideal city New Haven
― 'The City of God' and Metaphysics of Quadrat

●抄録

本研究ではヨーロッパ近代の建築ならびに都市における精神的な背景に着目し、新たな歴史観の構築を試みるものである。既往の近代建築研究の歴史観では、戦後の合理主義の視座から逆照射し、形態主義そして作家主義による経時的解釈が普遍性を獲得してきた。しかしこうした歴史観においては、その背景となる思想史あるいは宗教史あるいは本論で取り上げる精神史からの視点が黙殺され、建築や都市を決定付けてきた人間の精神性が排除されてしまっている。本研究は既往の大文字の近代建築史の概念に対して疑義を呈するとともに、精神史の視座から新たな歴史の枠組を提示し、近代建築史の再構築を目指している。

本研究は東京造形大学研究報第18号での論考『イギリス田園都市と心霊主義－星辰建築と円環の形而上学』(2017年)ならびに第19号での論考『アメリカ田園都市とピューリタニズム－千年王国思想からテクノロジカル・ユートピアへ』(2018年)を継承し展開させたものである。

本研究では、具体的にピューリタンがコネチカット州に建設したニューヘヴンの都市に着目し、ヨーロッパ並びにアメリカ大陸において、中世から近代にわたる精神史を決定付けている千年王国思想の視座から、都市空間における精神性についてその意義を問うものである。

第１章では新約聖書における終末論について着目し、ピューリタンの都市の精神性について論じている。新約聖書では「ヨハネの黙示録」において終末思想を読み取ることができる。迫害されたピューリタンが、キリスト再臨後に地上に降りてくる千年王国として、アメリカ大陸に「神の国」を建設した。彼らがどのように聖書を解釈したのか検証する。

第２章ではピューリタニズムのなかでも、最も世俗化した会衆派における契約神学の視点から共同体のあり方について論じている。この契約神学がさらに世俗化したものとしてホッブスの契約国家を位置付け、あらためて会衆派におけるキリスト教共同体の精神世界について都市空間との関係から解釈し検証する。

第３章では会衆派であるダヴェンポートが、ロンドンでの迫害を避けるために新大陸アメリカに移住し、コネチカット州にニューヘヴンという理想都市を建設した経緯を詳述している。このとき会衆派のジョン・コットンがニューヘヴンの都市空間へ与えた影響について検証している。

第４章では新約聖書に記述された新イェルサレムの空間構造について論じている。「民数記」と「ヨハネの黙示録」と「エゼキエル書」における具体的な記述について確認する。

第５章では17世紀にスペインで研究された聖書に記述されたソロモン神殿や新イェルサレムの都市空間について論じている。この解釈に基づいてダヴェンポートがニューヘヴンの都市を建設した。その両者の聖書の記述の解釈について比較検証する。そしてニューヘヴンという「神の国」の都市空間の精神性について論じ、総括としている。

本論の構成は以下の通りである。

第１章　「神の国」と終末論的共同体
第１節　「ヨハネの黙示録」と終末論的共同体
第２節　前千年王国思想と後千年王国思想

第２章　前千年王国思想と契約神学共同体
第１節　ピューリタン革命と迫害の歴史
第２節　会衆派とピューリタニズム
第３節　契約神学の共同体
第４節　神権政治と契約国家

第３章　理想都市ニューヘヴンの誕生
第１節　ジョン・コットンと会衆派
第２節　ダヴェンポートの理想都市
第３節　ハルトリプとダヴェンポート

第４章　聖書のなかに描かれた理想都市
第１節　聖書のなかの都市１「民数記」
第２節　聖書のなかの都市２「ヨハネの黙示録」
第３節　聖書のなかの都市３「エゼキエル書」

第５章　イェルサレムのソロモン寺院と
　　ニューヘヴン
第１節　イェルサレムの都市の歴史
第２節　ソロモン神殿の再建とフェリペⅡ世
第３節　フェリペⅡ世の「インディアス法」
　　における植民都市の空間
第４節　「神の国」ニューヘヴンの誕生
第５節　予型論の都市としてのニューヘヴン

第１章
「神の国」と終末論的共同体

啓蒙主義前夜である16世紀末から17世紀初頭にかけての時代には、ヨーロッパでは初期近代国家の形成と宗教国家の実現という、相反する国家の理想像が求められていた。その一方でカトリックとプロテスタントが対立する過程で、宗教と国家の相互浸透が進んだ。「理性の国」と「神の国」の建国は、前者は主にヨーロッパ大陸において、後者はヨーロッパ大陸を離れ新大陸アメリカを舞台にして繰り広げられた。そこではイギリスのピューリタンが、処女地である新大陸アメリカにおいて千年王国の実現を目指していた。

カトリックが後千年王国思想の立場をとるのに対し、プロテスタントは前千年王国思想の立場をとっている。プロテスタントではキリスト再臨と同時に、千年王国が地上で実現されると考えられている。新大陸への移民の歴史とは、プロテスタントの人々によるキリスト再臨が間近に迫っているという終末論に基づいている。間近に迫った「神の国」の出現を前にして、彼らは新大陸で準備を始めた。カトリックの支配するヨーロッパ大陸やイギリスへの期待はすでに断たれていたからである。

第１節　「ヨハネの黙示録」と終末論的共同体

「ヨハネの黙示録」とは、新約聖書の最後の書である。これは１世紀末頃に書かれた。ヨハネがキリストの死後60年に幻視したこの世の終末を記したものである。この「黙示録」という言葉とはギリシャ語で「覆いを取り除く」「真相を明らかにする」という意味である。「ヨハネの黙示録」には神が降臨する世界が明らかにされている。

「ヨハネの黙示録」では、終末にはキリストが再臨し至福の王国が地上に実現すると記されている。この王国は千年続いた後に最後の審判がおこなわれる。そして地上に新エルサレムが出現する。「マタイによる福音書」にはさらに詳しく終末の世界について記されている。

終末論とはユダヤの直線的な時間の概念に基づいている。すなわち始まりから一直線状に終わりへと至る時間の観念である。それがキリスト教に導入され、新たな宗教的世界観が生み出された。キリスト教では人々は原罪を持って生まれてくる。そして苦悩に満ちた時を過ごした後に初めて永遠の平和へ至り、救済されると考えられている。

それまでのオリエントの人々の宇宙観は円環的時間により成り立っていた。同じことを永遠に繰り返す宇宙に抱かれて、太古から同じ宗教儀式が営まれていた。しかしキリスト教は直線的な時間という新しい概念を地中海世界にもたらした。時間は前進して進展し、そして最後に燃え尽きるというのだ。この終末論が円環的宇宙に生きる人々を震憾させ不安を抱かせた。それと同時にその不安を払拭するために、救済を説くキリスト教は人々の心へと浸潤していく。(注1)

神は人々を救済するというよりも、世界の全ての終末を告げる者として存在する。キリスト教では個人の救済はない。なぜならば共同体による信仰が、基本となっているからである。すなわち「神の国」の到来が共同体全体の救済となっているからである。終末論がキリスト教の宗教共同体を結束させる。

しかし現実的にいえばキリストの再臨はありえない。「神の国」として新しいイェルサレムが地上に出現することも有り得ない。すなわちキリスト教は、来るあてもない至福の世界の到来を措定することにより、人々の人生が、不安のなかで苦悩に耐えながら死ぬまで拘束されていくという信仰のシステムなのである。隣人愛のもとで、到来するはずのない至福の世界を信じるしか他にすべがない宗教観がこうして構築され、円環的時間の宇宙は崩壊したのである。永遠の円環的宇宙に抱かれ、不安も苦しみもない幸福な人生を送っていた人々の人生を、キリスト教は不幸へと向かう終末論を強要することにより、救済という宗教観を選択することが不可避な状況へと陥れたのである。すなわちキリスト教に基づく共同体とは終末論的共同体といえるであろう。これがキリスト教における共同体の本質なのである。

第２節　前千年王国思想と後千年王国思想

千年王国思想は聖書の解釈の仕方により、前千年王国思想と後千年王国思想にわけて考えられている。基本的に後千年王国思想とはカトリックのキリスト教の理論である。４世紀に聖アウグスティヌスの解釈に基づいた理論である。すなわち彼

の『神の国』における後千年王国思想では、聖徒が支配している現在において千年王国は完全に実現されており、キリストは再臨しないで天に留まっている。そして千年を経てキリストが最後の審判のために地上へと降臨してくると考えられている。

それに対して前千年王国思想とは、主にプロテスタントの千年王国思想といえるであろう。前千年王国思想ではキリストの再臨と同時に千年王国が地上に訪れ、それが千年続いたあとにサタンが降りてきて最後の審判を下すと考えられている。

前千年王国思想では、間近に迫った千年王国の到来の前に、神による浄化がおこなわれると考えられていた。その準備のための浄化が聖徒たちにより事前におこなわれた。たとえば不敬な聖職者や王侯階級の廃止、有産階級の財産没収といったものである。また異教徒の根絶も浄化には不可欠であった。キリストが再臨するときには地上の世界はキリスト教一色に染まっていなくてはならないからだ。こうして浄化の準備を完了して初めて、千年王国がキリストの再臨とともに地上に実現されるのだ。(注2)

中世の時代を通じて宗教改革に至るまで、後千年王国思想が支配的であった。17世紀にプロテスタントは前千年王国思想を主張した。革命的な千年王国思想を情熱的に議論したのはイギリスのピューリタンたちである。特に1640年から1660年において急進派が終末論を展開した。ジョゼフ・ミードの『黙示録の鍵』(1627)は前千年王国思想を詳細に論じて「ヨハネの黙示録」を注意深く読解し、当時のイギリス社会に大きな影響を及ぼしていた。しかし1660年に王政復古がおこなわれるとイギリスの千年王国思想は終息してしまった。(注3)

イギリスにおいて千年王国思想が高揚していたのは1640年から1660年までの間である。この時期にピューリタンたちは相次いで新大陸へ移民した。彼らのほとんどは前千年王国思想を信奉している人々であった。頽廃したヨーロッパ社会に見切りを付け、真の教会の理念に基づく新しい都市をアメリカの荒野に建設しようとした。新大陸とは地上の楽園であり「神の国」の建設に最も相応しいところであると考えられていたからである。(注4)

第２章
前千年王国思想と契約神学共同体

千年王国思想を世俗化したものがユートピアであるということができるであろう。宗教的精神性を失った、純粋な理想的共同体である。そこでは資本主義的な経済活動や、政治的な規律が理想として描かれている。アメリカという国はピューリタンの前千年王国思想に基づいて建国された世俗的ユートピアである。このアメリカの建国への第一歩とは、1620年に最初に移民したイングランドの亡命者たちである。彼らは歴史的にピルグリム・ファーザーズと呼ばれている。彼らがその時に結んだ契約神学と千年王国思想はどのような関係にあったのであろうか。

第１節　ピューリタン革命と迫害の歴史

イングランドにおける宗教改革は、国王至上法が成立した1534年におこなわれた。その結果としてイングランド国教会が成立した。国王がイングランド教会の首長となった。それと同時にローマ・カトリックと断絶したのである。イングランドではルター派の影響のもとに祈祷書が1549年に編纂されたが、そこからカトリック的な解釈を完全に払拭することはできなかった。

しかしメアリーⅠ世の時代の1568年になると、イングランドは再びカトリック化された。ネーデルラントからイエズス会士が送り込まれた。このためプロテスタントは信徒集会が認められなくなった。しかしイングランドの宗教改革を望む声は絶えず、継続的に改革を推進することが合意された。このためイングランド教会が国家宗教として機能していたのは1689年の寛容法が成立するまでのことであった。それ以降イングランド教会は、イングランド国民全員をまとめ上げることはできなかった。こうしてイングランドにはピューリタンをはじめクエーカーなど多様な分離派が混在することになった。

ピューリタンとイングランド教会との緊張が高まったのは1640年頃である。ピューリタンの非合法活動に対し、国王は国外追放などの処罰をするまでに至った。この1640年からチャールズⅡ世の王政復古の1660年までが、ピューリタンの千年王国思想が最高潮に達した時期であった。

いわゆるピューリタン革命とは、1649年に王党派を打破した議会派のクロムウェルが、専制政治を断行する国王チャールズⅠ世を処刑するという、劇的な結果をともなっておこなわれた一連の改革の歴史を指す。しかしクロムウェルの独裁政治も国民の支持を得られなかった。

一方で預言者たちが、千年王国が1660年までに到来すると宣言していたにもかかわらず、終末が訪れることはなかった。こうして革命的な千年王国思想は、抑圧的な政治体制のもとで地下化し終息に向かった。急進派は政界から一掃された。

王政復古を経てチャールズⅡ世国王が教皇となり、ここにローマ・カトリックとの関係を断った。しかし次のジェームズⅡ世は専制的で、1688年の名誉革命で追放されてしまう。こうしてイングランドは、絶対王政から議会が主導権を握る立憲王政へと移行した。

第２節　会衆派とピューリタニズム

カトリックにおいて聖職者が神の意志の代弁者であった。モーセの十戒を盲信するカトリックに対し、ピューリタンは反律法主義の立場をとる。長老派（プレズビテリアン）は厳格なカルヴィニストである。イングランド教会とは対立していた。このためピューリタン革命を主導した議会派の多数が長老派であった。

これに対して会衆派（コングリゲーション）とは、急進的な分離派とカルヴァン主義的な長老派の中間に位置していた。この会衆派とは基本的に俗人によるプロテスタント信徒であり、牧師を信徒が決定するシステムをとる。より自由な教理を求める人々の集まりである。会衆派では、まさに会衆が主導権を握っていた。

会衆派は教会の独立を主張しており、その教会員になるには厳しい選別をパスしなくてはならない。神により選ばれた聖徒だけが教会に集うことを許可されたのだ。なぜならばその聖徒が牧師を選任するからである。入会の条件は全員の前での公開の信仰告白である。この回心体験告白は聖アウグスティヌスのいう「見える教会」において規定されている。天上の救済された人々の純粋な「見えない教会」に対して、地上でまだ生きている人々が形成するのがこの「見える教会」である。天上の純粋さには到底及ばないが、それに少しでも近付きたいとする人々のために地上の教会は造られたのである。

会衆派は宗教改革をさらに推し進めようとする宗派である。そして宗教を個人のものとした。個人の信仰のみによる救済を実現しようとしている。広義では同じプロテスタントではあるが、社会との密接な関係を主張するカルヴィニズムとは一線を画している。(注5)

ロンドンのイングランド教会では、会衆派がキリスト教共同体の中心となっていた。この会衆派教会を特徴付けているのが契約神学である。

第３節　契約神学の共同体

契約神学という思想の基本的な枠組ができたのは、1560年から1600年頃といわれている。そして1620年頃に、契約神学はプロテスタントにおいて正統な神学として認められるようになった。

契約神学では神は超自然的恩恵を人間に与え「恩恵の契約」を結ぶ。そのとき神からの恩恵の契約の伝達を司るのが聖霊とされている。人間はもともと不完全であり、自らの力では堕落を克服できないため再生できない。聖霊が超自然的な力を人間にもたらして、そこに信仰が可能となる。「父なる神」が選び「子なるキリスト」が償い、聖霊が人間に罪の償いを注ぐのである。(注6)

この契約は神から一方的に提供される。返礼は信仰だけである。この神に対して人間が信仰により救済されることを「信仰による義認」という。義認とは神が人間を正しいと認めることである。神の啓示として宣告され、信仰共同体が履行すべき「地上の契約」として課した共同体の法である。

これは推定証拠において成立している。将来神から受容するであろう恩恵は、それを目指している人間の善行が先行して立証していると考えられている。善行とは神の恩寵が、人間の魂のなかで働いていることの兆しである。この救済へと向かう人間の意志を予定調和として神が受容することが想定されている。予定通り救済されたときに、過去の地上での善行が、救済に不可欠な条件として結果論的に認識されるのだ。こうして信徒は毎日敬虔かつ道徳的な生活を送ることが強いられる。善行が強要された生活を一生送ることになる。

ここに契約神学の世俗的な兆候を読み取ることができる。本来神は存在していないため、救済自

体は存在しえない。存在しないはずの神を想定して、神の不在を認めないために、自らの善行により救済されるという、救済する主体を神から人間へと移行させた神学が契約神学である。回心体験告白もまた契約神学を演出するうえで欠くことのできない前提となる。本来神自体が存在しない。たとえ存在したとしても俗人に過ぎないプロテスタントの会衆派信徒全員が、神秘的な体験というものはそう簡単にできるはずがないからである。そのようなウニオ・ミスティカの体験はカトリックでは一生に一度あるかどうかと考えられていた。ベーメも一生に一度だけである。

信徒が捏造した神秘的体験を告白することによって、それを俗人である会衆派の信徒が判断し、神に代わって回心を認定し、教会への入会を認めるという儀式は、神との契約の形式を踏襲することにより、あたかも神的な手続きを踏んでいるかのような演出をしているに過ぎない。それは神が存在しないことを認めないながらも神性が失われないための苦肉の方策と考えられる。そして信徒たちは自分たちが神に選ばれた聖徒であると神に代わって宣言し善行を重ねて自己努力により神に頼らずに救済されるという世俗化されたピューリタニズムの神学である。ここでは信仰が形式化されてしまっている。こうして会衆派は神を観念的な存在にすることにより、厳格なカルヴァン主義の原罪の教義を回避する抜け道を見い出したのだ。もはや神が信徒の運命を決定することはないのである。運命は人間自身が決定できるのである。

カルヴァン主義ではどの人間にも原罪があり、人間の運命は生まれる前からすべて神が決定していると考えられている。このため悩める人は救われることなく、絶望から自殺へと追い込まれた。会衆派は、一度悔い改めた信者の自由を認めている。また会衆派はモーセの戒律に制約されることを拒否した反律法主義者であった。原罪も認めず、教会の統治も受けない。もちろんモーセの戒律を代行している聖書の福音の制約すらも拒否した。

こうして聖アウグスティヌスの後千年王国思想を、自分たちに都合がいいように解釈し直したのだ。キリストが再臨してもたらされるはずの「神の国」を、神の代わり自分たちの手で理想都市として、再臨前に会衆派が構築したものがアメリカの都市や国家である。ここに精神都市が生み出された。

第４節　神権政治と契約国家

歴史上ピルグリム・ファーザーズと呼ばれたピューリタンたちにより新大陸に最初の都市が構築された。彼らは新大陸へ上陸する直前に「メイフラワー号の誓約」という誓約書の契約をおこなったことで有名である。

これは契約神学をもとにしている。神と人間との救済の契約は、ここでは共同体と個人の契約へと読み換えられていることがわかる。単なる世俗的な植民地活動は、こうしてあたかも「聖なる神の実験」というヴェールに包まれて神聖化されてしまった。それをマタイ５章の「山上の説教」になかの「丘の上の町」として解釈することにより、千年王国思想に基づいた栄光ある勇断として、新大陸への移民と理想都市の建設を位置付けたのである。新大陸において「神の国」を建設することは、契約神学を社会契約へと世俗化しておきながら、あくまで契約神学として神の存在に基づく神聖な行為として自己正当化する解釈を貫いたものといえるであろう。それは共同体を神の威光で包み込んだ神権政治（シイオクラシー）の実践そのものである。

会衆派の反律法主義の延長線上に位置するのはトマス・ホッブス（Thomas Hobbes 1588-1679）である。彼は理性と唯物論によりキリスト教の原罪の救済を、万人の相互の闘争状態と読み換え、神を国家に置き換え、契約神学を国家と臣民の関係という世俗へ還元させてしまった。ホッブスは統治者が臣下を保護する限り、臣下は忠誠を要求できるとした。こうして神の意志に基づく伝統的な契約神学は世俗化して弱められた。ホッブスの『リヴァイアサン(Leviathan)』(1651)は世俗的政治理論の嚆矢となる。

アメリカの独立戦争を経て、この千年王国思想は完全に非宗教化されてしまった。神の大義は自由へと読み換えられ、アメリカ独立戦争を契機として敬神の時代から自由の時代へと移行していく。千年王国思想は現実の政治世界において、それまでの異端宗教との闘いから、専制政治に対する自由政治の闘いへと読み換えられていく。世俗化された千年王国思想は、全ての精神性を喪失してしまい、19世紀には単なる緑豊かな田園風都市を生み出していったのである。

第３章
理想都市ニューヘヴンの誕生

ドイツのハレ敬虔主義を代表とするアウグスト・ヘルマン・フランケの活動や、敬虔主義のヨハン・アルントの『真のキリスト教』は英訳され、両者はアメリカでも知られる存在となっていた。このフランケが当時文通していたのは、ボストンにいたピューリタンのコットン・マザーであった。その祖父ジョン・コットンと行動を共にしていたジョン･ダヴェンポートは、イギリスのサムエル･ハルトリプと同じサークルにいた。そのハルトリプはドイツの神秘主義者ヨハン・ヴァレンティン・アンドレーエやモラヴィア兄弟団のヨハネス・アモス・コメニウスと「クリスティアン・ユニオン」という知的サークルにおいて親交があった。このドイツとイギリスとアメリカにわたる知のサークルのなかから、新大陸にニューヘヴンという精神都市が誕生した。

第１節　ジョン・コットンと会衆派

新大陸のニューイングランドで、会衆派の構築に取り組んだのはジョン･コットン（John Cotton 1584-1625）であった。マサチューセッツ港湾植民地の創設期における精神的指導者であった。そして千年王国思想に基づいた聖徒たちの王国を造り上げることに取り組んだ中心的人物である。

ジョン・コットンはイギリスに生まれ、ケンブリッジ大学を卒業後リンカーンシャー州で教会の副牧師となる。1627年にコネチカットの宗教的指導者として頭角を現した。その頃からイングランドでは、ピューリタンへの迫害が激化してくる。コットンは1633年にカトリック教会への不服従を理由に牧師の職を解雇された。そして同年新大陸のボストンへ移住しボストン教会の牧師となる。

コットンが会衆派の思想を書いた『天上の王国への鍵』(1644)は、コットンの理論の集大成である。コットンはアメリカの会衆派教会の組織の独立性を確立し、契約神学の教義を体系化した。コットンはニューイングランドの教会は完成された教会であるとして、聖アウグスティヌスと同じ後千年王国思想の解釈を示した。(注7) 強固な千年王国思想者であったコットン・マザー（1662-1727)は、ジョン・コットンの孫にあたる。

第２節　ダヴェンポートの理想都市

ジョン・コットンが1633年に新大陸へ亡命した後を追いかけるように移民したのはジョン・ダヴェンポート（John Davenport 1597-1670)であった。コットンはダヴェンポートと頻繁にロンドンで会合を重ね活動していた。彼は反律法主義の立場からコットンを支援し続けていた。それは二人が移民する前の1631年から1633年のことである。ダヴェンポートは最初にオランダへ移民しようと検討をかさねていたが、最終的にニューイングランドのボストンへ1637年に移住した。ダヴェンポートはニューイングランドでコットンを訪れたとき、この地を出ることを勧められた。こうして彼は1638年にコネチカットに理想都市ニューヘヴン(New Haven)を建設した。この都市こそ、イングランドにいた頃から構想していた理想都市としての「神の国」なのであった。［図1］

ダヴェンポートがコネチカットに1638年に建設したニューヘヴンという都市はコネチカット州の南部海岸沿いに位置する。その空間構造は注目に値するものであった。都市の外郭は完全な正方形である。例外的に港との間に正方形の外郭から飛び出すような街区が加えられていた。中央正方形

図01　1670年代のニューイングランド

図02　ニューヘヴン、1812年当時

部分は3×3の九街区へと均等に分割された格子構造をなしている。中央の街区が広場になっており、それを取り囲む八つの街区が住宅地となっている。都市は幾何学的な空間構成で、空間にヒエラルキーがないという典型的なプロテスタントの空間特性を持つ。それは神のもとでの信徒の平等を表現している。[図2]

この理想都市ニューヘヴンも1665年にはコネチカット州の法に従わざるをえなくなり、自治を放棄する結果となった。こうしてダヴェンポートは1667年に再びボストンに戻り、翌年ファーストチャーチの牧師となる。それはすでに亡くなったジョン・コットンが、かつて牧師を務めていた教会であった。彼は1670年に亡くなると、コットンの墓の隣に埋葬された。(注8)

第3節　ハルトリプとダヴェンポート

ダヴェンポートが生涯にわたり親交を重ねた人物の一人が、サムエル・ハルトリプ(Samuel Hartlib 1600-1662)であった。彼はプロシアに生まれ、イングランドのケンブリッジ大学に学んだ。17世紀のヨーロッパ文化を語るうえで、ハルトリプはイギリスとドイツの両方の知識人を結び付けた要のような存在である。ハルトリプはロンドンで知的サークルである「見えない学院(invisible collage)」を主宰しており、多くの知識人が参加していた。彼はイギリスを訪れたモラヴィア兄弟団のヨハネス・アモス・コメニウス(Johannes Amos Comenius 1592-1670)と親交を重ねていた。

またハルトリプはドイツで三十年戦争が始まる直前に、ドイツの神秘主義者ヨハン・ヴァレンティン・アンドレーエ(Johann Valentin Andreae 1586-1654)が主宰していた知的サークルである「クリスティアン・ユニオン」に参加していた。プロテスタンティズムに貫かれた汎ゲルマン文化のサークルである。このサークルには三十名ほどの知識人が参加していた。

ダヴェンポートはアンドレーエのクリスティアノポリスにおける教育の重要性に共感し、ニューヘヴンの都市に大学を設立しようと計画した。そのために彼はコメニウスに協力を仰ごうと考えていた。なぜならばコメニウスはアンドレーエのクリスティアノポリスのもつ百科全書的な教育思想を高く評価していたからである。それはコメニウスの汎智学(Pansophia)に通底するものであったからだ。ハルトリプを通してコメニウスとの関係をダヴェンポートは持ち続けていた。現在コメニウスは教育者として高く評価されているが、彼は本質的に狂信的な終末論的千年王国思想者であったことを忘れてはならない。

ダヴェンポートが新大陸へと移住する前にネーデルラントに四年間滞在していた。当時この国はカルヴィニストが支配する民主々義の国であり、プロテスタント思想のコスモポリタンの中心地であった。ネーデルラントでダヴェンポートはイングランドのバプテストやスペイン系ユダヤ人などと自由に交歓し、彼らの様々な思想から刺激を受けている。(注9)

ダヴェンポートはこうしてニューヘヴンの都市を、ハルトリプとアンドレーエとコメニウスの理念をもとにして創り出したのだ。ニューヘヴンという都市とはデューラーの理想都市から始まり、アンドレーエのクリスティアノポリス、そしてシックハルトのフロイデンシュタトなど、様々な聖書に従って構築された、ドイツのプロテスタントの精神が反映された都市の系譜の上に位置付けられるものである。

ニューヘヴンという都市は、ドイツでは開花することがなかったアンドレーエのクリスティアノポリスの影響の下に、新世界のアメリカで開花した最初のプロテスタントの亡命者のための都市であった。

第４章
聖書のなかに描かれた理想都市

ダヴェンポートは新大陸に理想都市ニューヘヴンを建設した。彼は千年王国思想の信奉者であり、新大陸ではすでに千年王国が始まっていると解釈していた。ではプロテスタントにおける千年王国思想が求めている地上の「神の国」はどのような世界なのであろうか。その「神の国」の姿を解明しようと神学者たちが挑戦する。彼らは再現のための根拠を聖書に求めた。代表的な聖書の一つは、終末論の出自となっている「ヨハネの黙示録」である。そのほかにも聖書にはヒントとなる記述が多数認められる。

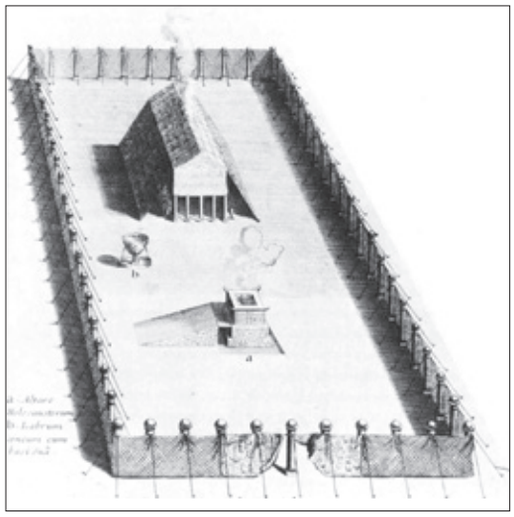


図03　ユダヤ民族の砂漠の野営における天幕の礼拝所のプロトタイプ、1720年
研究 ベルンハルト・ラミィ

第１節　聖書のなかの都市１
「民数記」

旧約聖書のなかに「民数記」というものがある。これは冒頭と末尾にイスラエル人の人口調査が記されていることから命名された。しかし本文のほとんどはエジプトのゴシェン地方を脱出し、シナイ半島を40年かけて移動し、約束の地であるカナンに到達するまでの記述にさかれている。

本格的な精神史における共同体の発生は、モーセの出エジプトの時代に遡る。イスラエル人の十二部族はモーセを指導者としてカナンへ向かう。彼らは血縁集団ではあるが、単なる烏合の衆ではない。信仰により結ばれた社会的な連合体であった。その契機は、約束の地カナンへの旅の途上、シナイ半島の山でモーセの前に神が現れ、神がモーセに十戒の法律を授けたことに始まる。このモーセを引き継いだのは、年代順にヨシュア、サウルそしてダビデである。サウルが指導者の時に、イスラエル人の十二部族は、社会的連合体から王制の国家として再編され、サウルが初代の王に就いた。そしてダビデ王の時代にイェルサレムに入り、ここにイスラエル王国が誕生する。

イスラエル人の十二部族は、集団的な人格を持つ法的な共同体を形成していた。それはモーセの律法という、神から課された「地上における契約」に基づく信仰共同体である。これが最古の契約社会であり、宗教に基づいた倫理的共同体である。この延長線上に契約神学や神権政治そして世俗化された契約国家が展開されていく。

「神の国」を知るうえで興味深い記述は旧約聖書「民数記」に見出すことができる。シナイ半島を移動するイスラエルの十二部族が、荒野で野営したことに関する記述である。イスラエル人の十二部族とは、アブラハムの孫であるヤコブの直系の十二支族のことを指す。彼らは野営をしながらカナンの地を目指している。その野営のときのイスラエル人の十二部族の天幕の空間配置の構成が原形となり、後のイスラエルの都市が構築されたというのだ。そこにプロテスタントの都市の特徴を規定する正方形の起源が求められる。

旧約聖書「民数記」(2:1-34)にはイスラエル人の十二部族の野営の空間構成が詳細に記されている。すなわち荒野での野営では、東西南北の四方に、それぞれ三部族の天幕が並び、中心の広場を取り囲むような厳格な空間配置が規定されている。その中央の広場には礼拝用の天幕が設けられている。(注10)

旧約聖書「出エジプト記」(26:1-36)には、詳細に天幕の材料と色彩と施工方法が記されている。十二部族の天幕で囲まれた中央の広場には、礼拝所が設けられている。その仕様についても「出エジプト記」(27:1-21)に詳細に記るされている。(注11)[図3]

「民数記」に記された野営の空間構成はそのまま都市のダイアグラムとして読み換えることが可能である。このダイアグラムには三つの大きな特徴がある。一つ目は正方形の平面構成であること。二つ目は十二部族それぞれの集団を構成する周囲に連壁があること。三つ目は大小の正方形の組み合わせで全体が構成されていることである。

十二部族の十二という数字は、キリスト教では

図04　ユダヤ民族の砂漠の野営天幕配置図、1647年
研究 ヤコブ・ユダ・レオン

図05　天上のイェルサレム、1534年
作画 ルーカス・クラーナハ

完全数となる。すなわち十二使徒、二十四人の長老、新エルサレムの十二の門など各所に登場する。それはルネサンスの時代に占星術の十二宮と結び付けられて、宇宙をも内包するイメージが構築されていく。

天幕による仮設の共同体は、このダイアグラムにならい、野営の時にその都度何度も設営される。アムステルダムのユダヤ教のラビであるヤコブ・ユダ・レオン（Jacob Judah Leon 1602-1675）は、この「民数記」を詳細に研究し、イスラエル人の十二部族の野営の図を描いて見せた。その野営のダイアグラムに則り、イスラエルの地で造られた四十八の都市について、詳細な大きさが「民数記」（35:1-6）に記されている。（注12）［図4］

これ以降、聖書をもとにした都市空間では、全て正方形という幾何学的図形の構成により、その精神的世界が表現されるようになったのである。

第２節　聖書のなかの都市２「ヨハネの黙示録」

新約聖書において具体的な都市の姿が描写されているのは「ヨハネの黙示録」であろう。これは「民数記」におけるイスラエル人の十二部族の野営に基づく都市空間のダイアグラムとは別の、もう一つの都市のダイアグラムである。

「ヨハネの黙示録」（21:10）はこの世の終末の到来を明瞭に語っている。最後の21章では、キリストの再臨とともに、神のもとを離れて空から新しい都であるイェルサレムが降ってくると記されている。新約聖書の「マタイの福音書」（6:10）では「御国がきますように。みこころが天でおこなわれるように、地でもおこなわれますように」と書かれている。神の世界と同じ御国が地上にもたらされるのだ。

「ヨハネの黙示録」（21:11-21）によると、新イェルサレムの都は正方形である。その一辺の長さは12000スタディオン（2200㎞）である。城壁の高さは144ペキュス（65m）であり、そこには十二の門がある。門の上には十二の天使が警護しており、イスラエル人の十二部族の名前が記されている。門の数は、東西南北にそれぞれ三ケ所ずつある。この城壁には十二の土台があり、その上には小羊の十二使徒の名前が刻み込まれている。城壁は純金で築かれ、ガラスのように輝いている。十二の土台は宝石で装飾されている。「神の国」としての天上の都市新イェルサレムは全てキリスト教の完全数から構築されていた。［図5］

「ヨハネの黙示録」における新イェルサレルムという都市の記述から分かることは、その都市がキリスト教の完全数である十二が組み込まれた正方形であったことである。

第３節　聖書のなかの都市３「エゼキエル書」

新イェルサレムの都に関する記述は「エゼキエル書」（40、41、42）においてより詳細である。その新イェルサレムの神殿を囲む正方形の城壁の一辺の長さは５百アンマ（225m）と記されている。城壁の厚さは5mあり、その壁に沿って奥行11ｍの部屋が中庭の周囲を取り巻いている。神殿の中庭には、もう一つの中庭がある。それは45m四方の大きさだ。その中央に祭壇が設けられている。また「エゼキエル書」（45:1-9）によるとこの500アンマ四方の神殿の周囲は、神殿を中心として、縦11㎞、幅９㎞の聖域が規定されている。

この神殿の空間は全て正方形により構成されていることが分かるであろう。正方形の外郭を形成する城壁の内部中央には、入れ籠状に第２の中庭

がある。それも正方形である。

規模はともかく「エゼキエル書」においても「ヨハネの黙示録」においても、新イェルサレムに関する都市の記述は、それ以降の精神史としての西欧都市文化を決定付けてしまった。その正方形の出自を遡ると、「民数記」に記されたイスラエル人の十二部族の野営の天幕の配置と新イェルサレムの空間構成のダイアグラムへと辿り着くのである。

「天上のイェルサレム」という基本の型は、建築ばかりでなく絵画やユートピア文学におけるライトモチーフとなり、西欧文化はそのイメージから離れることができなくなってしまった。その決定的な都市の型とは正方形であった。「神の国」としての精神都市は、正方形という基本的な幾何学の形而上学に基づいており、全体から部分まで全てがこの理念により構成されているのである。

第5章 イェルサレムのソロモン神殿とニューヘヴン

現在のイェルサレムの都市は、キリスト教とユダヤ教の両者にとっての聖地である。しかし驚くべきことに、イェルサレムの都市の真実の全体像が把握されたのは、19世紀に考古学上の研究が開始され、実測調査や発掘作業がおこなわれるようになってからのことである。それまではイェルサレムは全く別の姿として認識されていたのである。16世紀末から17世紀初頭にかけて取り組まれたイェルサレムのソロモン神殿の空間構成の再現に関する研究が、ダヴェンポートの新大陸でのニューヘヴンの構想に多大な影響を及ぼしていたのである。

第1節　イェルサレムの都市の歴史と都市像

イェルサレムの都市の歴史は紀元前3000年にまで遡る。ギホンの泉のあるオフェルの丘に先住民によりイェルサレムの街が造られた。カナンの地にはイェルサレムの他にアシケロンという街があった。

紀元前1000年直前にダビデ王がカナン人の城塞都市イェルサレムを攻め落とし、それまでの都ヘブロンに代わりイェルサレムをイスラエル国の首都にした。そのダビデ王の息子であるソロモンが王位を継承した。紀元前965年から七年間かけて、イェルサレムの街の北側のシオンの丘の上に、ダビデの息子ソロモン王が、第一神殿といわれるソロモン神殿を建立した。この神殿の大きさなどについては旧約聖書の「列王記」に詳しい。

紀元前587年にバビロニアの攻撃でイェルサレムは陥落し征服された。そして翌年には 第一神殿は完全に破壊されてしまった。そのバビロニアがペルシャに敗れると、バビロニアへ連行されていたユダヤ人たちは再びイェルサレムに戻ることを許され、再建に着手した。

紀元前530年に第二神殿の土台が完成し、紀元前515年3月に第二神殿が完成した。こうしてイェルサレムは再び繁栄の時代を迎えた。この時代に旧約聖書が編纂された。そして紀元前37-34年にヘロデ王がヘロデ神殿と宮殿を造り、イェルサレムを大改築した。

紀元が変わりローマ帝国の時代となる。イェルサレムは西暦66年にローマと戦争を開始し、67年にローマ軍が大量にイェルサレムへ攻撃を仕掛けた。73年にはイェルサレム神殿が完全に崩壊し、ユダヤ人は離散した。神殿国家も同時に消滅した。

その直前にキリストが誕生している。そして西暦38年に処刑された。４世紀にローマ帝国は迫害していたキリスト教を国教とした。

このソロモン神殿の復元が注目されたのは、16世紀の宗教改革を契機としている。すなわち千年王国思想において終末論が喧くなると、「神の国」の造り方が問われるようになったのである。そして聖書を読むと、神が創った都市に関して記されていることがわかってきた。

バビロニアにより破壊されてしまったイェルサレムの都市とソロモン神殿の再建とは、神がダビデに与えた神聖な空間の再構築を意味する。それは神が与えたという意味で、「ヨハネの黙示録」における新イェルサレムと同じように、天上から地上に降りてきた「神の国」としてのパラダイスなのだ。イェルサレムの都市とソロモン神殿の空間には、必然的に天上界の世界が反映されていた。それは神が創った理想の空間あり、最も調和した空間であるはずなのだ。そのイェルサレムの都市とソロモン神殿を再建させることは、神聖な神の設計図を手にいれることを意味する。それは千年王国思想の神学者にとって、十分意義のある研究テーマであったことは疑いようがない。[図6]

イェルサレムの都市とソロモン神殿の当時の姿を再現することは、宗教改革以降のカトリックにとってもプロテスタントにとっても重要な研究テーマとなった。結果として再現された神聖なイェルサレムの街やソロモン神殿は、宗教的な香りに幾重にも包まれたものとなった。イェルサレムの都市とソロモン神殿のイメージを決定付けた代表的な人物は、オランダ生まれのクリスティアン・フォン・アトリホム（Christian von Adrichom 1533-1585）である。彼はケルンのアウグスティヌス修道院の院長を務めた人物であるが、1584年にイェルサレムの都市図を掲載した全三巻の歴史書『Urbis Hierosolyma Depicta』を出版した。この地図絵は1588年に『Civitates Orbis Terrarum』に収録された。その結果この本をとおして、イェルサレムの都市の姿は全世界へ広まると同時に、ヨーロッパ世界におけるイェルサレムのイメージを決定付けてしまったのである。その後描かれたイェルサレムの絵地図は、クリスティアンの絵地図をもとに描かれたものが多い。アトリホムが描いた創造上の都市イェルサレムは三つの街区に分節されている。その中央の街区のなかにソロモン神殿が位置している。神殿は四重の正方形の連壁で同心円状に囲まれていることが判る。(注13)[図7]

ヨーロッパのキリスト教文化圏において、キリストの再臨によってもたらされる新イェルサレムという千年王国ばかりでなく、聖都イェルサレムのソロモン神殿もまた、考古学的な発掘がおこなわれる前の18世紀まで、聖書の記述に基づいてアトリホムが描いた純粋なイメージのなかにだけ存在していたのである。

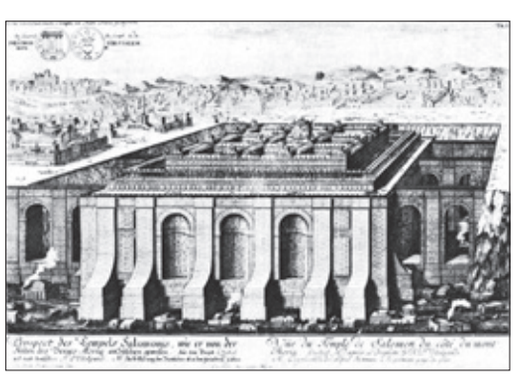


図06　ソロモン神殿
作画 ヨハン・フィッシャー・フォン・エルラハ

図07　イェルサレム都市図、1584年
作画 クリスティアン・フォン・アトリホム

図09

図10

図08　エゼキエルが幻視した新イェルサレムの平面図、1551年
研究 セバスティアン・カスタリオン

図09　イスラエル部族の野営図、1604年
研究 フアン・ボティスタ・ヴィラルパンド

図10　イスラエル部族の野営図と占星術、1604年
研究 フアン・ボティスタ・ヴィラルパンド

図08

第２節　ソロモン神殿の再建とフェリペII世

宗教改革の時代の印刷技術が発展するにともない、数多くの聖書が印刷され出版された。こうして誰にでも直接神の言葉に接することができるようになった。その結果聖書の解釈が自由におこなわれ、16世紀末から17世紀初頭には数多くの聖書の注釈書が出版された。そして「ヨハネの黙示録」や「エゼキエル書」に描かれた都市や建築についての研究がおこなわれたのである。

「エゼキエル書」の研究を通してセバスティアン・カスタリオン（Sebastian Castalion）は、1551年にソロモン神殿の平面図を再構築した。正方形の神殿には二十五等分された 正方形が中心部にあり、そこが神殿となっている。その神殿には四方から二重の門としての部屋を通過しないと到達できないような空間構成となっている。この小さい正方形の四倍の大きさの正方形の中庭が四隅に設けられている。結果としてソロモン神殿の空間は、四種類の大きさの正方形により巧みに構成された建築空間となっている。(注14)［図8］

最も興味深いソロモン神殿の研究はスペインでおこなわれた。それはスペイン国王フェリペII世（Felipe 1527-1598）のもとで、「エゼキエル書」の研究がイエズス会の修道士により取り組まれたからである。その成果は1596年から1604年にかけてジェロニモ・プラド（Jeronimo Prado）とフアン・ボティスタ・ヴィラルパンド（Juan Bautista Villalpando）の二人により、全３巻の「エゼキエル書」の注釈書として出版された。ここではソロモン神殿の神秘的空間構造の再建案が数多くの図像により示された。この研究書は再版が繰り返され、ヨーロッパ全土に論議を呼び起こした。

その最初の図面を見てみよう。黒い小さな正方形が十六個整然と並んで、全体が大きな正方形を構成している。その中央部に建築物がある。この図面が意味しているのはヴィラルパンドが、ソロモン神殿の再生を、イスラエル部族が荒野で野営した原点に立ち返ったところから始めていることである。そこからソロモン神殿の論理的な解釈を始めている。彼は野営の空間のダイアグラムのような第一案から二段階展開させて、最終的にソロモン神殿の平面構成へと到達させているのだ。

最初の図面では、大きな正方形のなかに十六区画の天幕が描かれている。その中心部分には礼拝所の天幕がしつらえられている。結果として、隣り合う四つの部族の天幕により構成されて生まれる八つのコートヤードが、この礼拝所を取り囲んでいることになる。この野営の空間構成が、「エゼキエル書」に書かれたソロモン神殿の空間構成と一致することをヴィラルパンドは指摘して、次の段階へと展開させる。［図9］

第二案では礼拝所が、その大きな正方形の空間の中心からずらされている。結果として大きな正方形の中心部に小さい正方形の空間が生み出され、その空間が礼拝所の前庭広場のような意味合いを獲得している。この前庭と礼拝所の空間を、七つのコートヤードが囲んでいるような空間構成となっている。そのコートヤードには星辰により、占星術との関係が暗示されている。大きい正方形に接する外側の部族の天幕は、十二の使徒あるいは十二宮の意味が重ね合わされた精緻なアレゴリーとなっている。これによりイェルサレムは天上界の神聖な都市として位置付けられていることがわかる。［図10］

最終図では「エゼキエル書」の内容に沿って、イェルサレムの十二部族の野営のダイアグラムが具体的な建築として解釈し直されている。(注15)

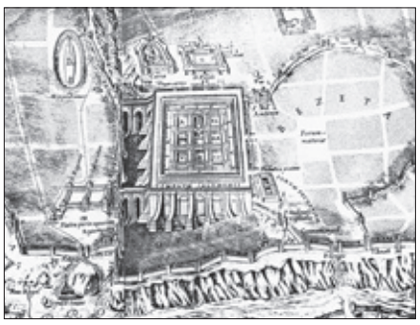


図12　古代イェルサレムの都市図、1604年
研究 フアン・ボティスタ・ヴィラルパンド

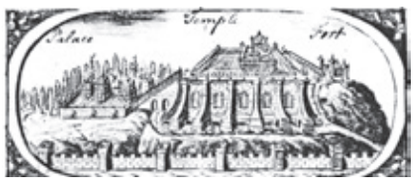


図14　イェルサレムのソロモン神殿とヘロデ王の神殿、1642年　研究 ヤコブ・ユダ・レオン

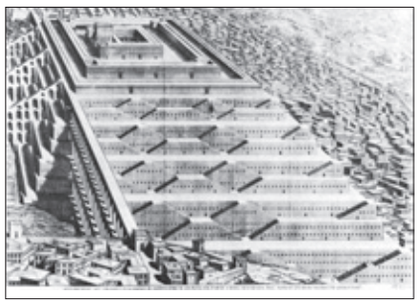


図16　上のイェルサレムの透視図、1720年
研究 ベルンハルト・レミィ

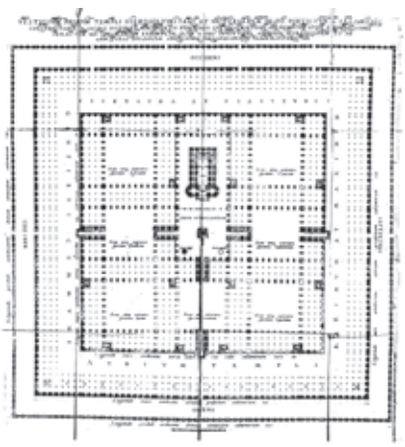
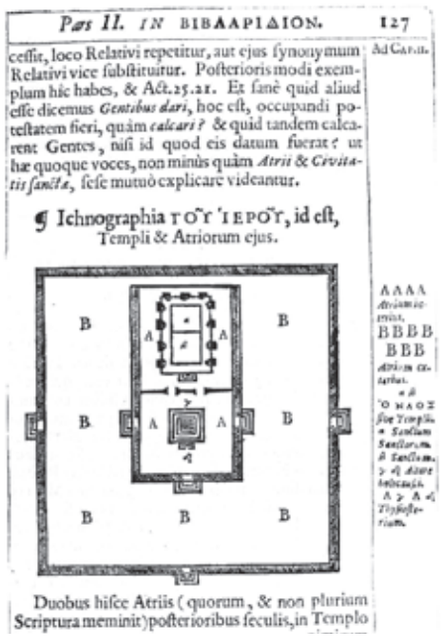


図11　エゼキエルが幻視した新イェルサレムの平面図、1604年
研究 フアン・ボティスタ・ヴィラルパンド



Pars II. IN BIBAAPIΔION. 127

cessit, loco Relativi repetitur, aut ejus synonymum Relativi vice substituitur. Posterioris modi exemplum hic habes, & Act.25.21. Et sanè quid aliud esse dicemus *Gentibus dari*, hoc est, occupandi potestatem fieri, quàm *calcari?* & quid tandem calcarent Gentes, nisi id quod eis datum fuerat? ut hæ quoque voces, non minùs quàm *Atrii* & *Civitatis sanctæ*, sese mutuò explicare videantur.

¶ Ichnographia ΤΟΥ ΙΕΡΟΥ, id est, Templi & Atriorum ejus.

Duobus hisce Atriis (quorum, & non plurium Scriptura meminit) posterioribus seculis, in Templo

図13　「ヨハネの黙示録」の新イェルサレムの平面図、1627年　研究 ヤコブ・ユダ・レオン

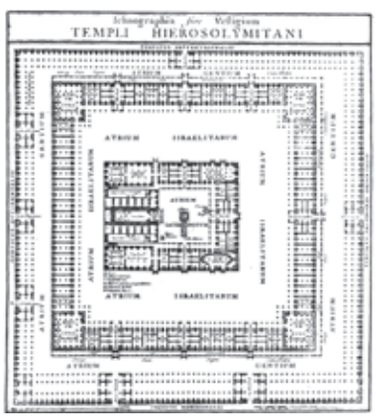


図15　天上のイェルサレムの平面図、1720年
研究 ベルンハルト・レミィ

［図11、12］

ヴィラルパンドと同じように「エゼキエル書」を研究して、もう一つ別のソロモン神殿の姿を導き出したのはヨゼフ・メーデ（Joseph Mede）である。彼が1632年に描いたソロモン神殿の平面構成では、一見ヴィラルパンドの案とは全く異なるように見える。しかし両者は「エゼキエル書」の解釈を踏まえると、重要な空間の関係性は全く同じであることが理解できるであろう。(注16)［図13］

アムステルダムのユダヤ教のラビであるヤコブ・ユダ・レオンもまた、1642年にソロモン神殿の外観図を描いている。これも正方形の平面構成である。［図14］

多くの神学者が研究を重ねていたが、その典型的なものとして指摘されているのが、ジョン・ライトフート（John Lightfoote）が1650年に書いた『寺院（The Temple）』である。彼は聖書における記述を、全て幾何学の秩序として解釈した。具体的には正方形の入れ籠状の空間構成へと到達している。彼は幾何学における正方形こそ、神の考えを体現していると考えていた。またトーマス・バーネット（Thomas Burnet）の『地球の神聖な理論（Sacred Theory of the Earth）』(1681）は、聖書にならって地球の成立の歴史を神学的に説明したものであり、広く読まれていた。(注17)

ベルナルド・ラミィ（Bernard Lamy）が1720年に描いたソロモン神殿の復元図は大胆であり壮麗でもある。シオンの丘を全て神殿で覆い尽くしてしまった。［図15、16］

こうしたなかで日本で提案された「エゼキエル書」のソロモン神殿の解釈の図が非常に興味深い。これまで言及されたソロモン神殿の復元図と比較すると、神秘的な正方形の幾何学的な構成が徹底されていないことが判るであろう。正方形の形而上学が喪失してしまった世俗的な建築の空間構成へと妥協されていることが分かる。ここからは神性や精神性を感じることはできない。［図17］

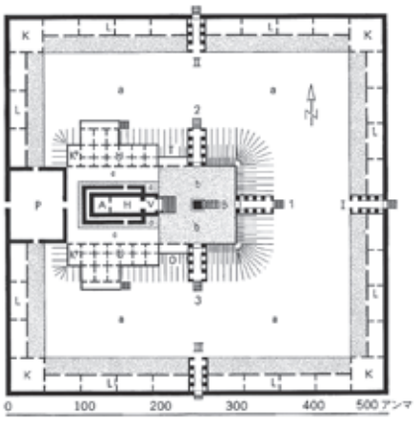


図17 「エゼキエル書」に基づくイェルサレム神殿の平面図

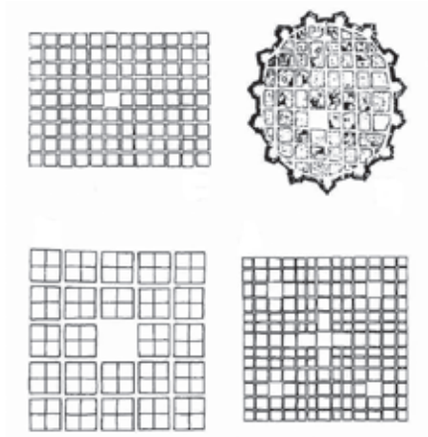


図19 「インディアス法」に基づくスペイン植民地の平面図

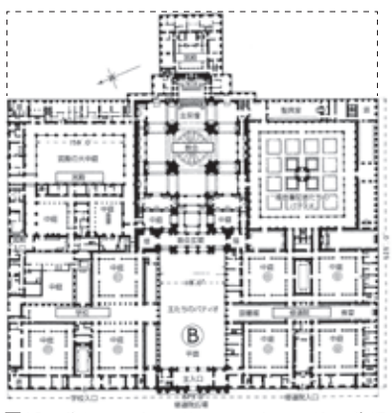


図18 サン・ロレンツォ・エル・エスコリアル 平面図 1562-1582年
設計 ファン・バウティスタ・デ・トレド、ファン・デ・エレーラ

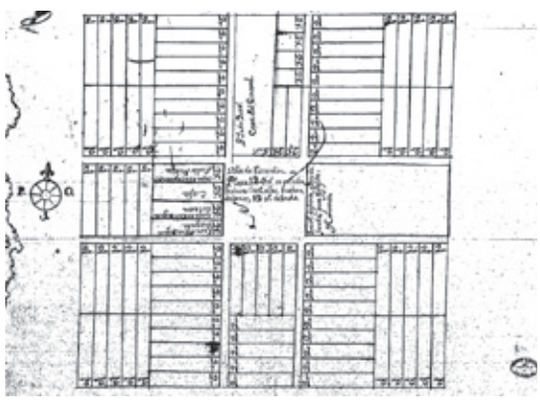


図20 中央アメリカのエスカンドレの都市平面図、1750年

第３節 フェリペII世の「インディアス法」における植民都市の空間

スペインでは「エゼキエル書」の聖書研究がフェリペII世の助成のもとでおこなわれていたことはすでに述べた。ここで1596年から1604年にかけてジェロニモ・プラドとファン・ボティスタ・ヴィラルパンドがソロモン神殿の空間分析を提示した。

興味深いのは同時代にフェリペII世がマドリッド西北55㎞に建造させたサン・ロレンソ・エル・エスコリアル修道院である。この大規模な修道院兼宮殿の大きさは、幅207m奥行161mあり、300を越える部屋を容している。1557年のフランスとのサン・チンティンの戦いの勝利を記念し、20年かけて建設された。勝利した日が聖ロレンソの日であったことに因んで命名された。1562年に着工し1582年に竣工している。設計はファン・バウティスタ・デ・トレドによる。途中でファン・デ・エレーラに引き継がれ、この建築はスペイン・ルネサンスが開花した時代のエレーラ様式を代表とする作品といわれている。

どうしてエル・エスコリアルの空間構成が興味深いのであろうか。それは一目瞭然であろう。ヴィラルパンドが分析した「エゼキエル書」のソロモン神殿の平面構成と酷似しているからである。そしてエル・エスコリアル修道院の中央の突出部分の宮殿までを含めた奥行寸法はほぼ207mであり、正方形のなかに収まっていることは看過されてはならない。(注18)[図18]

さらに興味深いことは、フェリペII世が同じ時代の1573年に発布した勅令である。これは世界を制覇していたスペインによる植民地に関する都市計画法である。「インディアスの発見、植民、平定に関する新法律」は148条から成る。この法律は通称「インディアス法」と呼ばれている。

スペインが世界に築いた都市に共通する特徴は、基本的に植民地の都市空間が正方形の格子構造を

なしており、その中央に方形の広場があるということだ。その事例の一つとしてホセ・デ・エスカンドンが中央アメリカで設計した15の都市のうちの一つを取り上げてみよう。彼の名前を付けたエスカンドンの都市の空間構成である。この空間分割は、先術したセバスティアン・アスタリオンが研究分析したソロモン神殿の平面図に酷似している。(注19)[図8、19、20]

なぜ両者の空間がそれほど酷似しているのであろうか。その理由は両者の空間の出自が同じであるからであろう。すなわち「エゼキエル書」のソロモン神殿の空間原理から、スペインの植民地の都市空間の原形がつくられたのだ。フェリペII世のもとで、キリスト教による世界制覇の証として、聖書のなかに原形をもとめ、新イェルサレムとして植民都市を構築しようとしたと考えるのはそれほど的外れなことではないであろう。(注20)

第４節　「神の国」ニューヘヴンの誕生

ジョン・コットンはアメリカという新大陸に都市を構築しようとするときに、キリスト教が生まれる以前のイスラエルの建国の歴史の過程のなかに自らを位置付けていた。すなわち新大陸における聖アウグスティヌスの「神の国」を建設を、キリストの再臨へ至る過程として神学的に理論化していた。イスラエル人の十二部族がイェルサレムとソロモン神殿を構築したように、今こそ選ばれた聖徒からなる会衆派教会だけが、神の命令によるモーセの掟を新大陸で復興させることができるのだ。

コットンが1639年から1641年に執筆した三巻からなる主著『黙示録16章に関する注釈』によると、千年王国の開始は1655年と計算されていた。終末はもうそこまで迫ってきているのだ。(注21)

半世俗化された会衆派のピューリタニズムでは、契約神学に基づいて救済が保証されていた。しかしそれはカルヴィニズムにおけるような一方的に神から与えられる救済ではなかった。会衆派の聖徒は救済を達成するために自ら準備できる。自分の運命を自分で支配できるという合理主義的に変容されたピューリタニズムであったのだ。

ダヴェンポートは、1633年から1635年の四年間オランダに滞在していた。その時に出会ったのが、アムステルダムのユダヤ教のラビであるヤコブ・ユダ・レオン (Jacob Judah Leon 1602-1675)であった。彼は当時イェルサレムのソロモン神殿の再建のため、聖書の研究に取り組んでいた。彼はまず最初にソロモン神殿のあるイェルサレムの都市の原形として「民数記」の研究から始めていた。そして彼はイスラエル人の十二部族の野営の図を描いて見せた。その野営のダイアグラムから描き出されたイェルサレムの都市とソロモン神殿にダヴェンポートは感動した。レオンの計画を激賞した内容の手紙をハルトリプへ送っている。(注22)

コットンの後を追うようにニューイングランドへダヴェンポートが移住してきた。1637年のことである。彼はロンドンにいたころからコットンと親交を重ねていた。ニューイングランドでコットンはダヴェンポートに、聖書に基づいた「神の国」の建設の助言をおこなっている。こうしてダヴェンポートはボストンを離れ、理想都市の実現のためにコネチカットへと向かったのだ。

ダヴェンポートはすでにアムステルダムで、ラビのレオンの研究に基づいて、新しい都市の計画に着手していた。「ヨハネの黙示録」や「エゼキエル書」に書かれた新イェルサレムやソロモン神殿から、神聖な「神の国」暗号を解読していた。イギリスのコモンローの代わりにモーセの戒律に従い、「神の国」としてコネチカットにニューヘヴンの都市を計画したのだ。コットンも「ヨハネの黙示録」の新イェルサレムこそ、自ら実現しようとしていた「十二使徒の教会」の完璧な姿であると考えていた。この会衆派の教会の理想の空間を、ダヴェンポートは都市へと読み換えた。彼はソロモン王のように振る舞い、ニューヘヴンが完璧な「神の国」となるように理想を追求した。その結果ダヴェンポートは、九街区からなる格子状空間構造を持つ正方形の都市へと辿り着いたのである。

第５節　予型論の都市としてのニューヘヴン

従来の研究ではニューヘヴンの都市の直交型格子状平面構成は、合理主義的な重商主義の幾何学として解釈されることが当然とされていた。しかし現在ではその解釈は完全に否定されている。ダヴェンポートの計画したニューヘヴンの都市とは、徹底した旧約聖書の予型論の典型ということができるであろう。コネチカットというインディアンが支配していた新大陸の荒野に創られたパラダイ

図21 「エデンの園」、1675年　研究 アタナシウス・キルヒャー

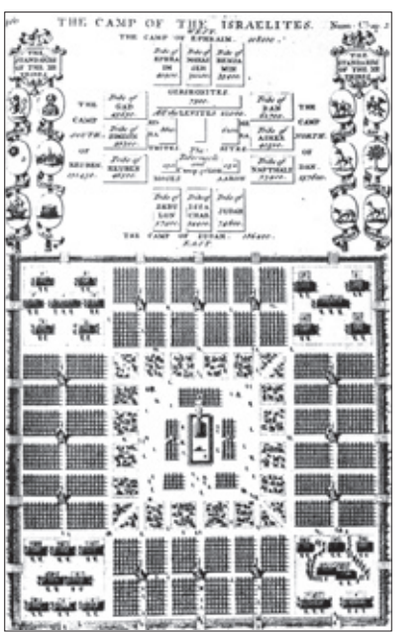


図22 ユダヤ民族の砂漠の野営天幕配置図、1730年
研究 アーサー・ベッドフォード

スとして、ニューヘヴンはまさに「エデンの園」であったのだ。(注23)［図21］

ダヴェンポートは「エゼキエル書」から導き出された九つの正方形に基づいて、ニューヘヴンの都市空間の骨格を決定した。ニューヘヴンの正方形の一辺の長さは1/2マイルとなった。この大きさをヨセフ・メーデの研究を参照して、ダヴェンポートが導きだした。ニューヘヴンの都市は約800メートル四方である。九つの街区の一辺の長さは261メートルである。

このニューヘヴンという都市は「出エジプト記」のイスラエル人の十二部族の野営天幕の空間構造を新大陸において再現したものなのだ。天上の新エルサレムの十二の門は、ニューヘヴンでは

図23 ニューヘヴン都市地図、1748年当時

街路として解釈されている。中央の礼拝所の天幕があった場所は広場となっている。正方形の都市の外郭には小さい正方形の十二辺が並ぶ。この十二はキリスト教における完全数である。新イェルサレムの十二の門、十二使徒のイメージがこの都市に重ねられた。この「神の国」の中央の広場の東側にダヴェンポートは居をかまえた。なぜならば十二部族の野営の時に、モーセが中央の礼拝所の東側に天幕を張っていたからである。(注24)［図22］

「エゼキエル書」から引用されてできた都市空間には重要な意味が託されていた。すなわち彼はどの街区にも、少しのヒエラルキーも生じないように配慮したのである。ここには聖書で謳われた道徳的な平等の精神が体現されていた。コットンは均質に正方形へと分節された都市空間に、聖書の理念が見て取れると高く評価した。

カトリックの精神世界では階層的でヒエラルキーのある空間を特徴とする円環型のユートピア都市が数多く創出されていた。それ対してプロテスタントはカトリックの階層的な理念を否定していた。このためプロテスタントの理想都市では、階層的円環構造の代わりに、平等の理念を表現するために、正方形の格子状の空間構造が選択されたのである。［図23］

本論は2018年度東京造形大学教育研究助成金の研究に基づくものである。

注釈

第１章

注1　ユダヤ的終末論では＜始まり＞は空の無垢と純粋を持っている。その再現のために宇宙が新しい世界を生み出すときには、古いものは全て消し去らねばならない。再創造すべき世界を浄化して＜空＞にする。この世界が決定的に廃されて初めて新しい創造が生まれる。古い世界の根絶が重要である。初めての完全さへと戻ることだけが唯一の可能性なのである。千年王国思想における＜千年＞の出自はペルシアの終末論である。それはゾロアスター教の善神であるマズダとゾロアスターに捧げられた文章のなかに認められる。千年はある程度の間という意味であったが、やがて象徴的な意味を持つようになった。J. P. キィレベール、杉崎泰一郎監訳『ミレニアムの歴史』新評論、2000年、pp.18-45.

注2　ノーマン・コーン、江河徹訳『千年王国の追求』紀伊國屋書店、1978年、pp.119-129.

注3　ジャン・ドリュモー、小野潮訳『千年の幸福』新評論、2006年、pp.332-343.

注4　ニューイングランドでは17世紀に千年王国思想の解釈に基づく書籍が数多く出版された。たとえばトマス・ハリオット『世界の楽園』、ジョージ・ラルソップ『地上の楽園』、トマス・トートン『新たなカナン』などである。注3 pp.364-365.

第２章

注5　会衆派は基本的に宗教改革をさらに推し進めようとする宗派である。会衆派では幼児洗礼はするものの、それだけでは教会の正会員とはなれない。成人になると回心体験を経験しそれを告白するこにより正式な教会員と認められる。この回心告白は1634年頃にニューイングランドに広まりはじめ、1636年までに確立された。小倉いずみ『ジョン・コットンとピューリタニズム』彩流社、2004年、pp.140-141.

注6　注5 pp.174-175.

第３章

注7　注5 pp.83-93.

注8　Vincent Scully,Erik Vogt "Yale in New Haven－Architecture & Urbanism" Yale University New Haven, 2004, pp.37-51.

注9　Michael J. Lewis "City of Refuge－Separatists and Utopian Town Planning" Princeton University Press, 2016, pp.77-80.

第４章

注10　旧約聖書翻訳委員会『民数記 申命記』岩波書店、2001年。

注11　旧約聖書翻訳委員会『出エジプト記　レビ記』岩波書店、2001年。

注12　注10.

第５章

注13　Kenneth Nebenzahl "Maps of the Holy Land" Abbevill Press・Publischers New York, 1986, pp.90-91.

注14　John Archer 'Puritan Town Planning in New Haven' "Jounal of the Society of Architectural Histroians" Vol.XXXIV 34, Nuber 2., May 1975, pp.146-147.

注15　注14 p.148.

注16　注8 p.47.

注17　注8 pp.44-45.

注18　William Alexander MacClung "The Architecture of Paradise－survivals of Eden and Jerusalem" University of California Press, 1983, p.83.

注19　布野修司、ヒメネス・ベルデ、ホアン・ラモン『グリッド都市－スペイン植民都市の起源、形成、変容、転生』京都大学学術出版会、2013年、pp.123-183, 345-362.

注20　注8 p.13.

注21　注3 pp.343-372.

注22　注9 pp.79-80.

注23　ニューヘヴンの正方形格子構造は、1975年まで正しい研究がおこなわれてこなかった。測量士による合理的な設計、ウィトルウィウスからの引用など様々な解釈がおこなわれていた。ピューリタンの千年王国思想として聖書の新イェルサレムの引用として解釈が初めておこなわれたのは、John Archer 'Puritan Town Planning in New Haven' (1975)においてである。注8 p.356.

注24　注8 pp.13-14, 44-48.